

# 高齢者の生きがいとその関連要因

中野いく子<sup>\*1</sup>・中島辰弥<sup>\*2</sup>・森久保俊満<sup>\*1</sup>

## Measurement of IKIGAI among elderly people and investigation of factors associated with IKIGAI

Ikuko NAKANO <sup>\*1</sup>, Tatuya NAKASHIMA <sup>\*2</sup> and Toshimichi MORIKUBO <sup>\*1</sup>

### 〈抄録〉

本研究は、高齢者の生きがいと生きがいに関連する要因を明らかにすることを目的とする。老人クラブの会員を対象に、①生きがいを感じているか、②「生きがい感」、③「生きがい対象」を尋ねる調査を行った。データは、249人（男122人、女127人）から得られた。高齢者の7割は「生きがい」を感じていること、「生きがい感」は生きる喜びや満足、心の安らぎなどととらえている人が多いこと、「生きがい対象」には自分の趣味や好きなことをあげる人が圧倒的に多いことがわかった。生きがい対象スケール（12項目）の因子分析の結果、第一因子に「集団での社会貢献」、第二因子に「自分の楽しみ追及」、第三因子に「自己向上の意欲」が抽出された。各因子を従属変数とする重回帰分析を行った結果、第一因子には健康状態（ $p < .01$ ）と参加団体数（ $p < .05$ ）、第二因子には性別（ $p < .05$ ）、第三因子には年齢（ $p < .01$ ）と健康状態（ $p < .001$ ）の有意な関連が認められた。「生きがい」のある高齢期を送るには、健康づくりと社会参加、経済的支援が重要であることがわかった。

Key words：高齢者の生きがい、生きがい感、生きがい対象

## I. 研究の背景と目的

長くなった老後をいかに過ごすかは、個人にとっても社会にとっても大きな課題である。できるだけ健康で「生きがい」のある生活を送ることが望ましいことは言うまでもない。

「生きがい」については、わが国では、1960年代から論じられてきた。代表的なものとして、神谷の生きがい論がよく知られている。日本語らしいあいまいな言葉であるとしながらも、「生きがいの源泉、または対象」と「生きがいを感じている精神状態」との2通りの使い方がありと分類するなど、その後の議論や研究に大きな影響を与えた（神谷、1966）。

一方、政策としても、1963年に制定された老人福祉法の中に教養講座やレクリエーション、老人クラブへの援

助などの「生きがい対策」が規定され、それ以降、高齢者福祉施策の柱の1つとして推進されていく。就労や生産・創造活動、老人クラブ、学習・趣味、スポーツ・健康づくりなどの多種多様な施策が、国および地方自治体によって展開されてきた。介護保険制度の導入前は、これらの事業が在宅福祉対策の主要な部分を占めていた。

しかし、「生きがい」についての科学的、実証的な研究は、やや遅れて1980年前後ごろに始まった。先駆的な取り組みとして知られているのが、前田らの研究（1979）である。前田らは、「生きがい」の概念を検討し、「個人の心の充実感としての生きがい」と「充実感を与える事物としての生きがい」という2つの意味があるとした。これは、神谷の分類を踏襲したものと思われる。ただし、前田らは、「生きがい」の水準を測定する目的から前者の意味だけに絞って、「生きがい」を主観的な幸福感であると操作的に定義したうえで、アメリカで開

\* 1 東海大学健康科学部社会福祉学科（Department of Social Work, School of Health Sciences, Tokai University）

\* 2 滋賀県立総合保健専門学校看護専門課程（Department of Nursing, Shiga Prefectural School of Nursing and Dental care）

発されたカットナー (B. Kutner) らのモラル・スケール (1956) やロートン (M. Lawton) の PGC モラルスケール (1972, 1975)、ニューガーテン (B. Neugarten) らの生活満足度インデックス A (1961) などを紹介し、検討している。そして、PGC モラルスケールを用いた調査を行い、日本の高齢者の主観的幸福感、すなわち「生きがい」を測定するスケールとして使用可能であると結論づけた。以来、PGC モラルスケールや生活満足度尺度が「生きがい」の測定尺度として広く使用され、改良版の作成なども行われてきた (杉山ほか, 1981)。

「生きがい」という言葉は、誰もが知っている日常用語であるが、日本語特有のあいまいさと、ひとくちにはいいきれない複雑なニュアンスを表現していると指摘されているように (神谷, 1966)、概念を明確にするのは容易でなく、定義も定まっていない。果たして主観的幸福感や生活満足度は「生きがい」とみなせるのか、疑問視されるようになってくる。

そこで、「生きがい」そのものを測定するスケールの開発や「生きがい概念」と主観的幸福感の相違を検証しようとする研究が始まった。近藤ら (2003) は、「生きがい感」とみなせる項目かどうかを問う概念調査を行い、その結果から仮の構成概念を作成して、その内容を表す 18 項目を選び、再度調査を行って、16 項目の「高齢者向け生きがい感スケール (KI-式)」を作成している。このスケールは、因子分析により「自己実現と意欲」「生活充実感」「生きる意欲」「存在感」の 4 因子から構成され、基準関連妥当性、概念的妥当性、信頼性の高いことが確認されている。

青木 (2009) は、この「高齢者向け生きがい感スケール (KI-式)」の検証調査を行い、同様に 4 因子構造に収束したとして、汎用性があると結論づけている。ただし、3 質問項目は、因子負荷量がどの因子にも低く、削除したこと、また、各因子の信頼性係数が必ずしも高いとはいえず、とくに 2 質問項目からなる「生きる意欲」因子では、Cronbach の  $\alpha$  係数が 0.605 であったことから、質問項目を 3 つ以上にして、内的一貫性を高める改良が必要であると指摘している。

一方、「生きがい対象」についても測定尺度の作成が試みられている。高萩ら (1998) は、先行調査研究をレビューして、調査項目には、「生きがい対象」と「生きがい感」の 2 系統があり、「生きがい対象」に共通する調査項目を整理すると、趣味・余暇群、家族だんらん群、友人つきあい群、仕事群の主要な 4 群と少数派の社会貢献、信仰が抽出されたという。それを参考に仮説として「生きがい対象」の 4 類型、すなわち「自己の楽しみを

追求する類型 (A 類型)」「仲間とのだんらんを楽しむ類型 (B 類型)」「集団で社会に貢献する類型 (C 類型)」「仕事によって自己を達成する類型 (D 類型)」を設定し、それぞれ 3 項目からなる 12 項目のスケールを作成している。この 4 類型は、指向性 (自己の内部か外部か) と有用性 (個人的か社会的か) の 2 つ軸による 4 象限に対応するものと想定されている。しかし、因子分析の結果、固有値が 1 以上の因子は 3 つしか抽出されていない。そのため各類型から 1 項目を削除した 8 項目による 4 類型を改めて提示している。

長谷川ら (2007) も、神谷や見田 (1970) などの研究を踏まえて、「生きがい」構造モデルとして、「生きがい」が生じてくる対象とそれに伴う感情の 2 つを構成要素とするモデルを提案している。そして、「生きがい対象」に関する質問項目には、配偶者、子ども、健康、趣味のほか、過去の自分自身の状態と未来の自分自身の状態という時間軸を取り入れた 25 項目を設定して調査を行い、因子分析の結果、1 項目を除いて、「過去の人間関係」「現在の状態と役割」「未来の人間関係」「現在の子どもの孫」「配偶者 (現在と過去)」の 5 因子からなる「生きがい対象尺度」を作成した。さらにクラスター分析により「生きがい対象」の 5 つの型を示している。この尺度は、再検査信頼性に課題を残しているものの、「生きがい」を定量化する尺度として、また、「生きがい対象の型」による差異を表す尺度として有効であると述べている。

今井ら (2009) は、「生きがい概念」と主観的幸福感の相違を明らかにする研究を行っている。それに先立って、先行研究による「生きがい概念」を再検討し、「生存充実感」「生きる喜び」といった感情的側面と「意味と価値」「生きる価値」「存在価値」といった認知的側面の 2 側面があるという報告が多いこと、また、「自己実現」「目標・夢」といった未来に対する側面を中心的要素とするという報告もあることを指摘している。しかし、再現性や一般化が確保されるまでには至っていないと述べている。そこで、「生きがい概念」の構造を構築するために、グループインタビューにより「生きがいを感じている精神状態」(神谷) についての質的情報を収集し、61 質問項目を作成して、定年退職者グループを対象とした調査を行い、仮説として、「生きがい概念」は、「生活・人生に対する楽天的・肯定的感情」「未来に対する積極的・肯定的感情」「自己存在の意味の認識」の 3 因子を 1 次因子とし、「生きがい疎外感」を外部因子とする高次因子構造であるとした。それを、再度、異なる地域の中老年ボランティア集団を対象に調査をして、この

モデルの適合度が高いことを検証している。

そして、この「生きがい概念」と主観的幸福感の相違点は、①現在（およびこれまで）の生活・人生に対する個人的感情（満足感や充実感）は共通（重複）している。②「生きがい概念」は主観的幸福感より広範囲な概念で、時間性では「未来」方向に、関係性では「社会的」方向に広がりをもっている。③「生きがい概念」はポジティブ（肯定的）な概念であるが、主観的幸福感はどちらかというとネガティブ（否定的）な概念であると指摘している。

今井らは、主観的幸福感のほかに、近藤らの「生きがい感スケール」、神谷の生きがい概念、古谷野らの生活満足度（1989）などとの関係についても整理している。それにより、「生きがい感」については、全体的な概念構造がほぼとらえられつつあるとみてよいかもしれない。

しかしながら、実証的な研究レベルでの概念の確立および測定スケールの標準化には、今のところ成功しているとは言いがたい。

本研究では、概念や測定スケールの開発ではなく、実際に高齢者が日常生活の中で生きがいを感じているのかどうかという実態把握を目指した。具体的には、高齢者がどんなことに、どの程度生きがいを感じているのか、そしてその生きがいに影響を与えている要因は何かを明らかにすることを目的としている。

その際、神谷をはじめ、先行研究の多くが分類してい

た「生きがい感」と「生きがい対象」という2つの側面から、高齢者の「生きがい」の実態をとらえることにした。

## Ⅱ．方 法

### 1. 調査の対象と方法

神奈川県伊勢原市の老人クラブのうち、I地区にある13クラブの会員（880人）を対象とし、各クラブから無作為に3分の1（291人）を抽出して、調査客体とした。調査の方法は、クラブ単位に自記式質問紙を配票し、調査対象者が各自記入後、封筒に入れて、厳封したうえで、クラブ単位で回収した。有効回収数は249票、有効回収率は85.6%であった。

### 2. 調査の期間

2010年8月6日～9月5日の1か月間

### 3. 調査項目と変数化

調査項目は、基本属性（性、年齢、配偶者の有無、家族形態）、健康状態、経済状態、社会参加（団体参加）状況、生きがいの有無、生きがい感、生きがい対象である。

基本属性の項目は、表1に示したとおりである。

生きがいの測定は、①生きがいの有無、②生きがい感、

表1 分析対象者の基本属性

| 項目           | カテゴリー         | 実数（％）     |           |            |
|--------------|---------------|-----------|-----------|------------|
|              |               | 男性        | 女性        | 計          |
| 性            |               | 122(49.0) | 127(51.0) | 249(100.0) |
| 年齢（平均値±標準偏差） |               | 76.3±6.48 |           |            |
| 配偶者の有無       | 1. いる         | 108(88.5) | 65(51.2)  | 173(69.5)  |
|              | 2. いない        | 14(11.5)  | 62(48.8)  | 76(30.5)   |
| 家族形態         | 1. ひとり暮らし     | 8( 6.6)   | 25(19.7)  | 33(13.3)   |
|              | 2. 夫婦のみ       | 54(44.3)  | 31(24.4)  | 85(34.1)   |
|              | 3. 二世帯        | 44(36.1)  | 55(43.3)  | 99(39.8)   |
|              | 4. 三世帯        | 13(10.6)  | 7( 5.5)   | 20( 8.0)   |
|              | 5. その他        | 3( 2.5)   | 9( 7.1)   | 12( 4.8)   |
| 職業           | 1. 現在あり       | 15(12.3)  | 13(10.2)  | 28(11.2)   |
|              | 2. 過去にあり、現在なし | 104(85.2) | 94(74.0)  | 198(79.5)  |
|              | 3. 一度もなし      | 3( 2.5)   | 19(15.0)  | 22( 8.8)   |
| 経済状態         | 1. 非常にゆとりがある  | 3( 2.5)   | 7( 5.5)   | 10( 4.0)   |
|              | 2. ややゆとりがある   | 47(38.5)  | 63(49.6)  | 110(44.2)  |
|              | 3. どちらともいえない  | 51(41.8)  | 44(34.6)  | 95(38.2)   |
|              | 4. ややゆとりがない   | 18(14.8)  | 11( 8.7)  | 29(11.6)   |
|              | 5. 非常にゆとりがない  | 3( 2.5)   | 2( 1.6)   | 5( 2.0)    |
| 健康状態         | 1. 非常に良い      | 7( 5.7)   | 9( 7.1)   | 16( 6.4)   |
|              | 2. 良い         | 32(26.2)  | 28(22.0)  | 60(24.1)   |
|              | 3. ふつう        | 69(56.6)  | 79(62.2)  | 148(59.4)  |
|              | 4. 悪い         | 14(11.5)  | 11( 8.7)  | 25(10.0)   |
|              | 5. 非常に悪い      | 0( - )    | 0( - )    | 0( - )     |

注1 カッコ内は、性別を除き、カテゴリー別のパーセンテージである。

注2 職業で女性に1名の不明があり、合計は100.0%にならない。

③生きがいの対象について行った。生きがいの有無については、「現在、生きがいを感じていますか」という質問に「非常に感じている」から「非常に感じていない」までの5件法で回答を求めた。生きがい感については、先行研究を参考にして「生きがいを表すのに最もふさわしいと思われる」ものを7項目の選択肢から1つを選ぶ質問を用いた（表3）。生きがい対象については、高萩らによって作成された12項目を2件法で尋ねるスケールを使用した（表4）。「はい」に1点、「いいえ」に0点を与えて、合計点を算出し、生きがい対象スケール得点とした。高萩らのスケールは、信頼性、妥当性の検証が行われていないが、実態調査研究を踏まえて作成されており、我々の調査目的により適していることから採用した。

#### 4. 分析の方法

生きがいの有無と生きがい感については単純集計、クロス集計およびカイ二乗検定を行った。生きがい対象については、スケール得点を用いて因子分析を行い、抽出された因子を従属変数とする重回帰分析を行って、関連する要因を分析した。

#### 5. 倫理的配慮

本調査は、中島（7A生）が卒業研究として中野の指導の下に行ったものである（2010）。したがって、学部倫理委員会の審査は受けていないが、調査にあたっては、伊勢原市老人クラブ会長会の快諾を得たほか、依頼文書に、回答は無記名で、すべて統計的に処理を行い、個人情報外部に漏れることはないこと、研究以外にデータ・結果を使用しないことを明記した。また、調査を拒否しても不利益を被ることはないことを口頭で伝えた。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 基本属性

表1のとおり、性別では、男性が49.0%、女性が51.0%で、半々である。平均年齢は76.3歳、最年少は61歳、最年長は95歳である。75歳以上の後期高齢者が、男性では68%、女性では54.3%となっている。

配偶者が「いる」のは、男性では9割近い（88.5%）が、女性では5割（51.2%）と少なかった。家族形態は、男性では、最も多いのが「夫婦のみ世帯」の4割強、次いで「二世代世帯」の3割となっている。女性では、「二世代世帯」（4割弱）が最も多い。ひとり暮らしは、1割強と少なかった。

職業では、「現在、職業を持っている」は、男性で12.3%、女性で10.2%と少なく、男性の85%、女性の74%は退職者である。

経済状態は、ゆとりがある人は、「非常に」と「やや」を合わせて5割近く、ゆとりがない人は1割と少なかった。

健康状態では、「ふつう」と回答した人が6割と多かった。良好な人は、「非常に良い」と「良い」を合わせて、男女とも3割で、「悪い」と回答した人は1割に過ぎなかった。

#### 2. 社会参加状況

社会参加状況を知るために、所属しているグループや団体を尋ねた。

「老人クラブ・老人会」は、会員を調査対象としたことから、当然のことながら、全員が所属している。その他に多いのは、「趣味・健康・スポーツのサークルや団体」（57.0%）、「町内会・自治会」（46.6%）である。

グループや団体に、いくつ所属しているかを数えると、3つ（25.7%）が最も多く、次いで2つ（25.3%）、4つ（15.3%）、5つ（10.0%）、6つ以上（5.2%）となっている。所属数の最も多い人は、11であった。

#### 3. 生きがい

##### 3.1 生きがいの有無

現在、生きがいを感じているかどうかについては、「非常に感じている」が23.7%、「やや感じている」が47.0%、「どちらともいえない」が25.3%、「やや感じていない」が2.8%、「非常に感じていない」と回答した人はいなかった（表2）。

7割は生きがいを感じており、感じていない人はごく少数である。

##### 3.2 生きがい感

生きがいとは、「生きる喜びや満足感をもたらすもの」という回答が最も多く（31.3%）、次いで「心に安らぎをもたらすもの」（23.3%）、「生活に活力やはりをもちたすもの」（16.9%）の順であった。満足感や安らぎ、生活のはりなど、自己の「精神状態」ととらえている人が多かった（表3）。

一方、「生きる目標や目的になるもの」（3.6%）、「社会に役立っていると感じるもの」（5.6%）、「精神的な充実が得られるもの」（8.4%）、「自分自身を向上させるもの」（8.8%）などをあげる人は少なかった。目標や社会へ向かう外部指向性は弱いことがわかったが、平均年齢

76.3歳で、8割は70歳以上であることから、引退から年数を経た人が多いことも影響しているのかもしれない。

### 3.3 生きがい対象

どのようなことに生きがいを感じているかでは、最も多いのは「9.自分が楽しめる趣味をもつこと」(91.6%)、次いで「6.自分の好きなことができる時間をもつこと」(90.4%)、「7.家族とのだんらんやつながりをもつこと」(88.8%)、「4.自分らしいと感じる生き方をする事」(86.7%)となっている(表4)。

自分の楽しみや好きなことに生きがいを見出している人が圧倒的に多かった。

反対に少ないのは、「他の人より何事もうまくできること」(32.9%)、「仕事にうちこんで生活を豊かにする

こと」(54.2%)であった。

この高萩らのスケールは、上述のとおり、4類型を想定しており、「A.自己の楽しみを追及する類型」にはNo.4、6、9、「B.仲間とのだんらんを楽しむ類型」にはNo.1、7、12、「C.集団で社会に貢献する類型」にはNo.5、8、11、「D.仕事によって自己を達成する類型」にはNo.2、3、10の質問項目が該当する。

我々は、まず、12項目の因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行った。その結果、固有値1以上の因子は3つしか抽出されず、しかも因子負荷量が、どの因子にも極めて低い質問項目(No.1)があった。因子数や回転法、項目数を変えて、何度か因子分析を行ってみたが、高萩の提示する4類型は得られなかった。

最終的に、因子負荷量の低い1項目(「1.気のおけな

表2 生きがいの有無

| 項目   | カテゴリー        | 生きがいを感じる程度   |             |               |              |               | 実数(%)   |
|------|--------------|--------------|-------------|---------------|--------------|---------------|---------|
|      |              | 非常に<br>感じている | やや<br>感じている | どちらとも<br>いえない | やや感じ<br>ていない | 非常に感じ<br>ていない |         |
| 全体   |              | 59(23.7)     | 117(47.0)   | 63(25.3)      | 7( 2.8)      | 0( - )        | 3( 1.2) |
| 性別   | 1. 男         | 31(25.4)     | 56(45.9)    | 34(27.9)      | 1( 0.8)      | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 2. 女         | 28(22.0)     | 61(48.0)    | 29(22.8)      | 6( 4.7)      | 0( - )        | 3( 2.4) |
| 配偶者  | 1. いる        | 18(23.7)     | 29(38.2)    | 23(30.3)      | 5( 6.6)      | 0( - )        | 1( 1.3) |
|      | 2. いない       | 41(23.7)     | 88(50.9)    | 40(23.1)      | 2( 1.2)      | 0( - )        | 2( 1.2) |
| 家族形態 | 1. ひとり暮らし    | 6(18.2)      | 12(36.4)    | 11(33.3)      | 4(12.1)      | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 2. 夫婦のみ      | 19(22.4)     | 42(49.4)    | 21(24.7)      | 2( 2.4)      | 0( - )        | 1( 1.2) |
|      | 3. 二世帯       | 26(26.3)     | 48(48.5)    | 22(22.2)      | 1( 1.0)      | 0( - )        | 2( 2.0) |
|      | 4. 三世帯       | 5(25.0)      | 11(55.0)    | 4(20.0)       | 0( - )       | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 5. その他       | 3(25.0)      | 4(33.3)     | 5(41.7)       | 0( - )       | 0( - )        | 0( - )  |
| 経済状態 | 1. 非常にゆとりがある | 5(50.0)      | 5(50.0)     | 0( - )        | 0( - )       | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 2. ややゆとりがある  | 34(30.9)     | 55(50.0)    | 17(15.5)      | 2( 1.8)      | 0( - )        | 2( 1.8) |
|      | 3. どちらともいえない | 16(16.8)     | 44(46.3)    | 33(34.7)      | 1( 1.1)      | 0( - )        | 1( 1.1) |
|      | 4. ややゆとりがない  | 2( 6.9)      | 13(44.8)    | 11(37.9)      | 3(10.3)      | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 5. 非常にゆとりがない | 2(40.0)      | 0( - )      | 2(40.0)       | 1(20.0)      | 0( - )        | 0( - )  |
| 健康状態 | 1. 非常に良い     | 7(43.8)      | 8(50.0)     | 1( 6.3)       | 0( - )       | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 2. 良い        | 21(35.0)     | 29(48.3)    | 9(15.0)       | 1( 1.7)      | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 3. ふつう       | 27(18.2)     | 72(48.6)    | 41(27.7)      | 5( 3.4)      | 0( - )        | 3( 2.0) |
|      | 4. 悪い        | 4(16.0)      | 8(32.0)     | 12(48.0)      | 1( 4.0)      | 0( - )        | 0( - )  |
|      | 5. 非常に悪い     | 0( - )       | 0( - )      | 0( - )        | 0( - )       | 0( - )        | 0( - )  |

表3 生きがい感

| 順位 | 項目                | 実数(%)      |
|----|-------------------|------------|
| 1  | 生きる喜びや満足感をもらすもの   | 78( 31.3)  |
| 2  | 心に安らぎをもたらすもの      | 58( 23.3)  |
| 3  | 生活に活力やはりをもたらすもの   | 42( 16.9)  |
| 4  | 自分自身を向上させるもの      | 22( 8.8)   |
| 5  | 精神的な充実が得られるもの     | 21( 8.4)   |
| 6  | 社会に役立っていると感じられるもの | 14( 5.6)   |
| 7  | 生きる目標や目的になるもの     | 9( 3.6)    |
|    | 不明                | 5( 2.0)    |
|    | 計                 | 249(100.0) |

表4 生きがい対象

実数(%)

| 項目                       | 回答分布      |           |         |
|--------------------------|-----------|-----------|---------|
|                          | 1. はい     | 2. いいえ    | 不明      |
| 1. 気のおけない友達とつきあうこと       | 171(68.7) | 76(30.5)  | 2( 0.8) |
| 2. 仕事にうちこんで、生活を豊かにすること   | 135(54.2) | 111(44.6) | 3( 1.2) |
| 3. 新しい知識や技能を学んで、自己を高めること | 162(65.1) | 83(33.1)  | 4( 1.6) |
| 4. 自分らしいと感じる生き方をする       | 216(86.7) | 29(11.6)  | 4( 1.6) |
| 5. ボランティアなど社会に役立つことを     | 164(65.9) | 83(33.3)  | 2( 0.8) |
| 6. 自分の好きなことができる時間をもつ     | 225(90.4) | 23( 9.2)  | 1( 0.4) |
| 7. 家族とのだんらんやつながりをもつ      | 221(88.8) | 27(10.8)  | 1( 0.4) |
| 8. 団体やグループで社会とかかわる活動をする  | 172(69.1) | 75(30.1)  | 2( 0.8) |
| 9. 自分が楽しめる趣味をもつ          | 228(91.6) | 20( 8.0)  | 1( 0.4) |
| 10. ほかの人より何事もうまくできる      | 82(32.9)  | 165(66.3) | 2( 0.8) |
| 11. 会やグループの世話をして人から喜ばれる  | 155(62.2) | 92(36.9)  | 2( 0.8) |
| 12. 仲間とおしゃべりやくつろいだりする    | 207(83.1) | 39(15.7)  | 3( 1.2) |

表5 生きがい対象の因子分析結果(バリマックス回転)

| 項目                      | 第1因子  | 第2因子  | 第3因子  |
|-------------------------|-------|-------|-------|
| 8. 団体やグループで社会とかかわる活動をする | 0.711 | 0.179 | 0.272 |
| 11. 会やグループの世話をして人から喜ばれる | 0.710 | 0.145 | 0.242 |
| 5. ボランティアなど社会に役立つことを    | 0.615 | 0.076 | 0.313 |
| 12. 仲間とおしゃべりやくつろいだりする   | 0.409 | 0.342 | 0.002 |
| 6. 自分の好きなことができる時間をもつ    | 0.460 | 0.710 | 0.155 |
| 4. 自分らしいと感じる生き方をする      | 0.102 | 0.597 | 0.087 |
| 9. 自分が楽しめる趣味をもつ         | 0.103 | 0.540 | 0.127 |
| 7. 家族とのだんらんやつながりをもつ     | 0.184 | 0.515 | 0.082 |
| 3. 新しい知識や技能を学んで、自己を高める  | 0.208 | 0.184 | 0.700 |
| 2. 仕事にうちこんで、生活を豊かにする    | 0.182 | 0.138 | 0.562 |
| 10. ほかの人より何事もうまくできる     | 0.338 | 0.075 | 0.405 |
| 寄与率(%)                  | 16.39 | 15.02 | 11.41 |
| 累積寄与率(%)                | 16.39 | 31.41 | 42.81 |

い友達とつきあうこと」を除いた11項目による因子分析(主因子法、バリマックス回転)の結果を採用することにした(表5)。

第一因子に因子負荷の高い項目は、「8. 団体やグループで社会とかかわる活動をする」「11. 会やグループの世話をして人から喜ばれる」「5. ボランティアなど社会に役立つことを」「12. 仲間とおしゃべりやくつろいだりする」の4項目である。上位3つは、「C. 集団で社会に貢献する類型」に属する項目である。4つ目は、「B. 仲間とのだんらんを楽しむ類型」に属すると想定されていたが、集団で活動する仲間というところに反応したものではないかと推測される。この第一因子を「集団での社会貢献」としておく。

因みに4項目のCronbachの $\alpha$ 係数は0.763であり、内的一貫性は確保されているとみてよいであろう。

第二因子に因子負荷の高い項目は、「6. 自分の好きなことができる時間をもつ」「4. 自分らしいと感じる生き方をする」「9. 自分が楽しめる趣味をもつ」「7. 家族とのだんらんやつながりをもつ」の4項目である。上位3項目は、「A. 自分の楽しみを追求す

る類型」に属する項目である。4つ目は、「B. 仲間とのだんらんを楽しむ類型」に属すると想定されていたが、自分の好きなことや自分らしさの中には、家族とのかわりも含まれているのではないかと推測される。第二因子を「自分の楽しみ追及」としておく。 $\alpha$ 係数は0.700である。

第三因子に因子負荷の高い項目は、「3. 新しい知識や技能を学んで、自己を高める」「2. 仕事にうちこんで、生活を豊かにする」「10. ほかの人より何事もうまくできる」の3項目である。高萩らの「D. 仕事によって自己を達成する類型」である。本調査の対象は、ほとんどが退職・引退した者であるので、ここでの仕事は収入を得るための職業に限らず、参加している団体等での役割を含むと解釈しておく。第三因子を「自己向上の意欲」と呼んでおく。 $\alpha$ 係数は0.650であり、内的一貫性はやや低かった。

以上、「生きがい対象」は3因子、すなわち「集団での社会貢献」「自分の楽しみ追及」「自己向上の意欲」から構成されるという結果になった。

表6 生きがい対象に関連する要因（重回帰分析の結果）

|                                   | 第一因子（社会貢献） |          | 第二因子（楽しみ追求） |        | 第三因子（自己向上） |           |
|-----------------------------------|------------|----------|-------------|--------|------------|-----------|
|                                   | $\beta$    | $r$      | $\beta$     | $r$    | $\beta$    | $r$       |
| 性                                 | 0.053      | -0.089   | -0.147*     | 0.105  | 0.102      | -0.081    |
| 年齢                                | -0.080     | -0.149*  | -0.021      | -0.067 | -0.199**   | -0.225*** |
| 配偶者の有無                            | 0.069      | 0.142*   | 0.079       | 0.038  | 0.031      | 0.124*    |
| 健康状態2区分                           | 0.201**    | 0.254*** | 0.086       | 0.089  | 0.086      | 0.183**   |
| 経済状態2区分                           | 0.100      | 0.119    | -0.028      | 0.005  | 0.262***   | 0.251***  |
| 参加団体数                             | 0.147*     | 0.192**  | 0.029       | 0.033  | 0.099      | 0.151*    |
| 重相関係数 (R)                         | 0.342***   |          | 0.168       |        | 0.391***   |           |
| $\beta$ 標準偏回帰係数 $r$ 相関係数          |            |          |             |        |            |           |
| * p<.05    ** p<.01    *** p<.001 |            |          |             |        |            |           |

#### 4. 生きがいに影響を及ぼす要因

##### 4.1 生きがいの有無に関連する要因

生きがいの有無に関連する要因を探るために、「非常に感じている」と「やや感じている」を合わせて「生きがい有り」とし、「どちらともいえない」「やや感じている」「非常に感じていない」を合わせて「生きがい無し」とする2変数に操作的にまとめて、性、年齢2階級（前期・後期高齢者）、配偶者の有無、家族形態、職業の有無、経済状態、健康状態、社会参加状況（参加団体数）との関係をみた。カイ二乗検定により有意な関連が認められたのは、経済状態（ $p < .001$ ）と健康状態（ $p < .01$ ）であった。多くの先行研究においても経済状態と健康状態は、生きがいに影響を及ぼす関連要因であることが報告されており、支持する結果となった。

##### 4.2 生きがい感に関連する要因

生きがい感が、性、年齢2階級（前期と後期）、配偶者の有無、健康状態、経済状態により影響されるのかどうかをみた。カイ二乗検定で有意な関連が認められたのは、配偶者の有無のみであった（ $p < .05$ ）。配偶者の「いる」人は「いない」人より、「3. 生きる喜びや満足感をもたらすもの」をあげた割合が高かった。反対に、あまり割合は高くないが、「いない」人の方が「5. 精神的な充実が得られるもの」をあげた割合が4倍も多かった。配偶者の「いない」人の方が、相対的に自分自身の内面の充実に重きをおく傾向が窺われた。

健康状態と経済状態は、生きがい感については、有意な関連が認められなかった。しかし、健康状態の「良い」人の方が「ふつう・悪い」人よりも「1. 生活に活力やはりをもたらすもの」をあげた割合が高く、反対に「ふつう・悪い」人の方が「2. 心に安らぎをもたらすもの」をあげた割合が高かった。元気な人は活力やはりを、あまり元気でない人は安らぎを生きがいと感じる傾向があるのかもしれない。

##### 4.3 生きがい対象に関連する要因

生きがい対象として抽出された3因子の因子得点を従属変数として、基本属性（性、年齢、配偶者の有無）と健康状態、経済状態、社会参加状況（団体参加数）を独立変数とする重回帰分析を行った。性別では、男性を1、女性0、配偶者では「いる」を1、「いない」を0、健康状態では、「非常に良い」と「良い」を1、それ以外を0、経済状態では、「非常にゆとり」と「ややゆとり」を1、それ以外を0とするダミー変数を投入した。

結果は、表6のとおりである。第一因子には、健康状態（ $p < .01$ ）と参加団体数（ $p < .05$ ）が有意な関連が認められた。第二因子には、性別（ $p < .05$ ）が、第三因子には年齢（ $p < .01$ ）と経済状態（ $p < .001$ ）が有意であった。

第一因子の「集団で社会貢献」を生きがいにしている人は、健康状態が良い人、参加団体数の多い人であること、第二因子の「自分の楽しみ追求」を生きがいにしている人は、男性よりは女性、第三因子の「自己向上への意欲」を生きがいにしている人は、年齢の相対的に若い人、経済状態にゆとりのある人であることがわかった。

## IV. まとめと考察

高齢者の「生きがい」の実態を把握することを目的として、老人クラブ会員を対象に調査を行った。「生きがい」については、生きがいを感じているかどうかに加えて、「生きがい感」と「生きがい対象」の2つの側面から把握を行った。

現在、生きがいを感じているかについては、「非常に感じている」と「やや感じている」を合わせて7割の人が生きがいを感じているという結果であった。この結果は、内閣府の『高齢者の地域社会への参加に関する意識調査』（2008年）と比べると、やや低い。同調査では、「十分感じている」（44.2%）と「多少感じている」（38.3%）を合わせると8割であった。一方、少し古いが、仙

台市健康福祉事業団『市民の生きがいに関する意識調査報告書（60歳以上編）』（1994年）によると、生きがいを感じている割合は62.0%となっている。また、老人クラブ会員およびボランティアの高齢者を対象に行った桑山による調査（2006年）では、「非常に感じる」（24.4%）と「まあまあ感じる」（50.0%）で、あわせて7割強が感じているという結果であった。

これらの調査は、対象や質問のし方が異なるので、単純には比較できないが、老人クラブの参加者は、「生きがい」を感じている割合がとくに高いというわけではなかった。

今回は、老人クラブに対する評価を尋ねていないので、老人クラブの活動と生きがいとの関係を明らかにすることはできなかった。「生きがい対策」としての有効性については、今後の検討課題としておきたい。

次に、「生きがい感」については、「生きる喜びや満足感」「心に安らぎ」「生活に活力やはり」など、自己の精神状態ととらえる人が多く、「生きる目標や目的」「社会に役立つ」「自分自身の向上」など、未来や社会へ向かう外部指向でとらえる人は少なかった。

仕事からの引退によって、目標を定め、達成することや社会的役割を果す機会が少なくなってきたからだろうか。それとも、仕事についている時も、生きる目標や社会的役割、自己向上を生きがいにはしていなかったのだろうか。引退をはさんでの時間の経過が、「生きがい感」の中身に変化をもたらしたのかどうかは、今後、検討してみる必要があろう。

高萩らの調査によれば、引退直後でも生きがいを感じている割合は決して低くはない。「喪失感」よりも「開放感」を感じている人の方がむしろ多いとのことである。ただし、会社人間だった人では、生きがい感が低いことを明らかにしている。

いずれにせよ、高齢者の多くは、外に向かう目標や自己向上よりは、内に向かう喜びや満足感・安らぎなどの精神状態に生きがいを見出すことで、引退後も生きがい喪失に陥らずに過ごしているといえよう。

「生きがい対象」については、自分の趣味や好きなことに生きがいを見出している人が圧倒的に多かった。因子分析の結果、「集団での社会貢献」「自分の楽しみ追及」「自己向上の意欲」の3因子が抽出された。

「生きがい対象」については、研究が少なく、比較検討ができなかった。長谷川らの研究（2007）では、親、兄弟、友人・知人、自分自身、配偶者、子ども、孫についての過去と未来の状態、健康、仕事、趣味、社会的役割、家庭内役割などを生きがい対象ととらえている。

「孫が生きがい」とか、「趣味の踊りが生きがい」などといったことは、よく言われることである。このように具体的な人や事物、役割などを対象とする考え方も含めて、概念構成を検討してみる必要があろう。また、我々の調査では、家族だんらんや友達とのつきあいなど、一般的には「生きがい対象」とみなされている因子が抽出されなかった。回答分布では、家族とのだんらは9割近く、友達とのつきあいは7割弱が生きがいにあげており、とくに低いわけではなかった。その点からも、このスケールの見直しが必要であろう。また、信頼性、妥当性、再検査信頼性の検証も不可欠である。

今回は、「生きがい対象」は、上述の3因子から構成されるものとして、関連要因を探るための重回帰分析を行った結果、「集団で社会貢献」を生きがいとしている人は、健康状態がよい人と参加団体数が多い人、「自分の楽しみ追及」を生きがいとしている人は女性、「自己向上への意欲」を生きがいとしている人は、年齢が若い人と経済状態にゆとりのある人が多いことがわかった。この知見は、政策への示唆を与えるものである。

以上、本研究から、多くの高齢者は、「生きがい」を感じており、感じていない人はごく少数であること、「生きがい感」は、自己の精神状態ととらえている人が多いこと、「生きがい対象」は、「集団での社会貢献」、「自分の楽しみ追及」、「自己向上への意欲」の3因子から構成されることを明らかにすることができた。そして、「生きがい」を感じているかどうかは、健康状態と経済状態が有意に関連しており、「生きがい感」には、配偶者の有無、「生きがい対象」には、健康状態、参加団体数、性別、年齢、経済状態が有意に関連していた。これらの関連要因のうち、健康状態と参加団体数、経済状態は可変性のある要因である。

「生きがい」のある高齢期を送るには、高齢者自身の努力も必要であるが、政策としても、上記の3つ、すなわち健康づくりと社会参加、経済的支援を「生きがい対策」の主要な柱としてこれまでも増して推進していく必要がある。

## 注

本論文は、中島および伊勢原市老人クラブ会長会の了解のもとに、データの再分析を行ったものである。

## 引用文献

- 青木邦雄（2009）：高齢者向け生きがい感スケールの因子構造とその得点の検討、山口県立大学学術情報第2号『社会福祉学部紀要』、100-107。  
エイジング&インボルブメント研究会（代表 高萩盾男）

- (1998) : 『企業退職者の生きがいとエンパワメント』  
報告書.
- 長谷川明弘、宮崎隆穂、飯森洋史、星旦二、川村則行  
(2007) : 高齢者のための生きがい対象者尺度の開発と信頼性・妥当性の検討—生きがいの対象と生きがいの型の測定、日本心療内科学会誌、Vol.11、5-10.
- 今井忠則、長田久雄、西村芳貢 (2009) : 60歳以上退職者の生きがい概念の構造—生きがい概念と主観的幸福感の相違、老年社会科学、Vol.31-3、366-377.
- 神谷美恵子 (1966) : 生きがいについて、みすず書房、2004.
- 近藤勉、鎌田次郎 (2003) : 高齢者向け生きがい感スケール (K-I 式) の作成および生きがい感の定義、社会福祉学、第43巻第2号、93-101.
- 古谷野亘、柴田博、芳賀博ほか (1989) : 生活満足度尺度の構造—主観的幸福感の多次元性とその測定、老年社会科学、Vol.11、99-115.
- Kutner, B., Fanshel, D., Togo, A. M., et.al., (1956) : *Five Hundred Over Sixty: A Community Survey on Aging*, Russell Sage Foundatuin, New York.
- 桑山望 (2006) : 高齢者の生きがい要因とその相互関連性 (2006年度卒業論文)、1-55.
- Lawton, M. P., (1972) : The dimension of morale. In D.Kent (ed.), *Research Planning and Action for the Elderly*, Behavioral Publications, New York, 144-165.
- Lawton, M. P., (1975) : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : A revision, *Journal of Gerontology*, 30(1), 85-89.
- 前田大作、浅野仁、谷口和江 (1979) : 老人の主観的幸福感の研究—モラル・スケールによる測定の試み、社会老年学、No.11、15-31.
- 見田宗助 (1970) : 現代の生きがい—変わる日本人の人生観、日本経済新聞社.
- 内閣府政策統括官共生社会政策担当 (2008) : 『高齢者の地域社会への参加に関する意識調査』.
- 中島辰弥 (2010) : 高齢者の生きがいとその関連要因 (2010年度卒業論文)、1-41.
- Neugaten, B. L., Havighurst, R. J. and Tobin, S. S., (1961) : The measurement of life satisfaction, *Journal of Gerontology*, 16, 134-143.
- 仙台市健康福祉事業団 (1994) : 『市民の生きがいに関する意識調査報告書 (60歳以上編)』.
- 杉山善朗、竹中忠男、中村浩、佐藤豪、浦沢喜一、佐藤保則、斉藤桂紀、尾谷正孝 (1981) : 老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本語版 PGM の作成 (1)、老年社会科学、Vol.3、57-69.
- 杉山善朗、竹中忠男、中村浩、佐藤豪、浦沢喜一、佐藤保則、斉藤桂紀、尾谷正孝 (1981) : 老人の「生きがい」意識の測定尺度としての日本語版 PGM の作成 (2)、老年社会科学、Vol.3、70-81.

### Abstract

The purpose of this study is to measure IKIGAI among elderly people and to investigate factors associated with it. We conducted a research to inquire how deep elderly people feel IKIGAI, what feeling and objects of IKIGAI they have, for the members of Old People's Club at I-area in Isehara-shi. The main findings were as follows: (A) 70% of the elderly people felt IKIGAI. Many persons considered (B) pleasure, satisfaction and peace of mind as IKIGAI-feeling, and (C) hobbies and interests as IKIGAI-objects. Factor analysis found that IKIGAI-objects have a structure comprised of 3 factors. "Social contribution by group", "Pursuit of pleasure", "Will to self-advancement". The results of multiple regression analysis showed that "Health condition" and "Number of participating organizations" are significantly relevant to the first factor, "Sex" is significantly relevant to the second factor, "Age" and "Economical condition" are significantly relevant to the third factor.

**Key words:** IKIGAI among elderly people, IKIGAI-feeling, IKIGAI-objects, Feeling that life is worth living